



Title	総合的な英語運用力の評価についてⅠ: 「心理的実在文法」の観点から
Author(s)	大坪, 喜子
Citation	長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 30, pp.59-65; 1998
Issue Date	1998-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/6165
Right	

This document is downloaded at: 2019-03-25T06:11:39Z

総合的な英語運用力の評価について I

——「心理的実在文法」の観点から——

大 坪 喜 子

(平成9年10月31日受理)

The Evaluation of the Global Proficiency of English I

——From the Viewpoint of the Psychologically Real Grammar——

Yoshiko OTSUBO

(Received October 31, 1997)

0. はじめに

英語をコミュニケーションの手段として教えることを目標にするとすれば、当然のことながら、その評価をどのようにするのかということが問題となってくる。そして、それは、従来の英文法を中心にして教える場合とは異なる評価を必要とする。本稿では、特に、総合的な英語運用力の評価に焦点を当て、「心理的実在文法」の観点から検討することにした。以下、Iでは、総合的な英語運用力とはどのようにとらえるのかということについて、ついで、IIでは、総合的な英語運用力の評価とはどのようにすればよいのか、そして、そのために、どのようなテスト方法を用いることになるのかということについて検討し、英語科教育の中で、英語をコミュニケーションの手段として教える場合の評価とは何をなすべきであるのかを明らかにしたい。

I. 総合的な英語運用力とは

1.0. 総合的な英語運用力とは、一般的に言えば、英語の4技能、すなわち、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの運用能力を意味する。この中で、リスニングは、他の人が話した英語を聞いて理解する能力、また、リーディングは、他の人が書いた英語を読んで理解する能力、すなわち、英語(発話または文章)を受け取る(receptive)能力である。一方、スピーキングは、自分で英語による発話を創る能力、そして、ライティングは、自分で英文を書く能力、すなわち、英語(発話または文章)を創り出す(productive)能力を意味する。そして、これらの能力はお互いに密接に係わり合っているとわれわれは感じているであろう。しかしながら、一体全体、それはどのように説明することができるのであろうか。たとえば、リスニングは、他の人が創り出した英語の音声を通して情報を受け取る能力であるが、自分自身で話すことができる表現であれば、それを他の人が創り出した場合も、すぐに理解できることを多くの人が経験を通して気づいているであろう。また、リーディングについても、他の人が書いた英文を読んで理解する能力であ

るが、自分自身で書ける表現であれば、理解しやすいことを多くの人は知っているであろう。それは、一体、なぜであろうか。このことについて、ここでは、John Oller の「心理的実在文法」(the psychologically real grammar)という概念を用いて説明することにする。

1.1. まず、「心理的実在文法」とは何を意味するのかを、大まかに、説明しておく、たとえば、英語学習者に、ある英語発話(または、表現)が創り出せるとするならば、それは、その発話(表現)を創り出す文法を内在化(internalize)しており、その場合、その文法を意識しないで、自分の伝えたいことを伝えるためにその文法を使って、その英語発話(表現)を創り出していると考えられる。そして、その場合に、内在化されて、意識下になっている文法があると仮定している。それを、「心理的実在文法」という概念は表していると考えてよい。

この概念をより明確にするために、ここで、John Oller(1980:485)の「心理的実在文法」についての説明を見てみることにしよう。

The term *global proficiency* is one that has been used by such person as Professor Bernard Spolsky and Professor Jack Upshur. Both of them use it to refer to the internalized linguistic competence of language users. In my view the notion is best characterized in terms of *the psychologically real grammar* that the learner has internalized. For many reasons I prefer to think of that grammatical device as *a kind of "expectancey grammar"*---that is, a grammatical system that is capable of relating linguistic sequences to extralinguistic contexts. When a person is encoding information in the language, he is usually planning what to say and revising what he hears himself saying on the basis of what he expected to hear himself say. When a person is using the grammar receptively, he is usually anticipating what the speaker's or writer's next output will be, and he is constantly revising those anticipatory hypotheses (or expectations) on the basis of the signals that materialize in the mouth of the speaker or in the visual symbols on the printed page.

すなわち、Bernard Spolsky や Jack Upshur のいう「総合的言語能力」(global proficiency)は、「言語使用者が内在化している言語能力」(the internalized linguistic competence of language users)を表しているが、Oller は、この概念を「学習者が内在化している心理的実在文法」(the psychologically real grammar that the learner has internalized) というように表すほうがその概念の特徴を最もよく示すことができると考えている。このように考える根拠となる理由として、「一種の期待文法」(a kind of expectancy grammar) というような文法的仕組みについて考えるからであると言うのである。そして、この「一種の期待文法」とは、文法的に正しく並べられた表現、すなわち、言語的連鎖(linguistic sequences)を言外の脈絡(extralinguistic contexts)と結びつけることを可能にする文法体系(a grammatical system)であると考えている。それは、次のような過程を指している。すなわち、ある人が、「伝えたいこと」、すなわち、「情報」をある言語に組み込んでいくとき、(たとえば、自分の考えを英語で話すとき)、その人は、通常、何を言うかを考え、

そして、彼自身が言うのを聞くと期待していたことに基づいて、自分が言っているのを聞いて、それが自分が言いたいと思っていたことと異なっていれば、それを訂正していく。また、ある人が、その文法を受け身的に使っているとき、(すなわち、「話を聞いているとき」または、「読んでいるとき」)、彼は、通常、話し手、又は、書き手が次に言うことが何であるかを予測している。そして、話し手の発したことは、または、印刷されたページの上の書かれた文字で具体的に示されたことに基づいて、それらの「予測」、または、「期待」を絶えず訂正していく。すなわち、ある言語を使っているということは、そのような操作をしているというのである。そして、それは、内在化された「心理的実在文法」があると仮定することによって説明できると考えている。

言い換えれば、このような考え方の背景には、ある言語を知っているということは、その言語の文法を内在化しており、自由にその言語の文を創り出すことができるという考え方がある。このことは、次に示す Oller (1980: 489-490) から明らかである。

“Knowing a language” means having internalized its grammar (where grammar is broadly defined to include pragmatic factors). Surely it does not mean simply knowing something about the language or having analyzed something to do with the grammar of the language.

そして、われわれがここで考えている「総合的な英語運用力」も、英語の文法を内在化し、上で述べられた「一種の期待文法」の操作をしていると考えているのである。従って、この場合の文法は、具体的場面で、どのように使われるかという実地的な機能 (pragmatics factors) を含む広い意味の文法である。それは、単に、英語について何かを知っているとか、また、英語の文法に関する何かを分析したというようなことではないのである。

II. 総合的な英語運用力の評価について

2.0. 次に問題となるのは、このような総合的な英語運用力の評価は、一体、どのように行われることができるのかということである。本節では、総合的な英語運用力の評価が何をしなければならぬのかを明らかにするために、まず、従来の英文法・語彙を中心とする英語教育のしていたこと、および、それが総合的な英語運用力とどのように関わるのかを示すことから始めることにする。

次に示す Chastain (1980: 507) からの引用は、従来の英文法中心の英語指導の評価のポイントと英語運用力を評価する場合の評価のポイントの違いを示している。

... In general, most teacher-made tests have been paper-and-pencil tests. Most have been prepared with two principal goals in mind.

1. Do the students know the grammar?; and
2. Do they know the vocabulary?

In addition, most have included only those items that can be graded objectively.

Such tests are satisfactory for testing the elements of linguistic competence.

Students must know the building blocks of the language before they can assemble them in appropriate combinations to express themselves, and the teacher has the responsibility of devising for the students a testing program that provides adequate feedback on this phase of second-language learning. *However, a total testing program goes beyond vocabulary and grammar forms. One should test linguistic competence, but one should also evaluate communicative competence in all four language skills.*

すなわち、一般的に言えば、これまでのほとんどの教師手作りのテストは、「文法を理解しているか」、そして、「語彙を憶えているか」という二つの主な目標を心に描いて準備され、それらは、客観的に点数が付けられるものばかりであった。そして、そのようなテストは、言語能力 (linguistic competence) の個々の要素をテストするという点では十分であると言える。また、個々の要素を繋いで自分の意見を表す前に、その個々の要素がきちんと習得されているかどうかをテストすることは必要なことでもある。しかしながら、総合的なテストのプログラムとしては、語彙と文法形式だけに留まらず、さらに、4技能すべての運用能力 (communicative competence) を評価しなければならないと主張している。

2.1. 英文法中心の英語教育は、英語の文法規則をきちんと教えることに焦点が当てられていることは言うまでもない。次に示す Chastain (1980 : 508) からの引用では、伝統的な英文法中心の英語教育のしていた仕事を 'specific performance objectives' と呼び、次のように説明する。

Conducting the class on the basis of specific performance objectives permits the teacher to program the class according to exact specifications. Both the teacher and the students know what is to happen, if the outlined learning indeed takes place. Everyone knows exactly what the expected result is before learning begins. However, both teacher and learner must realize that specific performance objectives can be applied only to lower-level language learning activities and goals, i.e., those encompassing the acquisition of linguistic competence and certain non-communicative behavioral skills such as the ability to pronounce the sounds of the language.

すなわち、教師も学習者も学習すべきことをはっきりと知っており、学習が終わればどれだけのことを憶えることになるのかということを知っている。すなわち、'specific performance objectives' とは、正しい言語形式を学習するのがその目標であることになる。そして、言語学習において、文法形式をきちんと学習することは重要な仕事であることは言うまでもない。問題は、すでに Krashen & Terrell (1983 : 26) で指摘されているように、この言語についての知識を意識して学習することが直接的に運用力つながらないということである。したがって、この 'specific performance objectives' のみを指導目標とするのではなく、次の段階として、その 'specific performance objectives' のもとで学習したことが意識下になるように、または、内在化するように、その知識を運用するための指導をする必要がある。その段階を Chastain は 'expressive performance objectives' と呼び、区別し

ている。これは、学習者が自分の伝えたいことを表すために、それまでに学習した語彙や文法を自由に使って表現能力を伸ばすことを目標にする。言い換えれば、コミュニケーション能力を伸ばすための指導である。

ついでながら、ここで、Chastain (1980 : 508-9) のコミュニケーションについての説明を紹介しておこう。

True communication, on the other hand, cannot be anticipated and described exactly prior to the learning activity. The teacher cannot tell the student specifically what he or she must do or say to participate successfully in a communicative situation. For example, if the students are to study a chapter on writing friendly letters in the second language, the teacher might very well state that by the end of the chapter the students will be expected to be able to write a letter to a friend. But there is no way the teacher can determine exactly what must be in that letter in order to satisfy the stated goal. Indeed, the students can fulfill the stated goal with learned grammar and vocabulary couched in an endless variety of linguistic constructions to express a wide diversity of ideas, opinions, events.

すなわち、真のコミュニケーションは教師によってコントロールされることはできないということ、言い換えれば、コミュニケーションの場では、学習者が、自分で、これまでに学習した語彙や文法を選んで、自分の表したいことを表すためにそれらの語彙や文法を用いるのである。教師は、前以て、学習者が創り出す語彙や文法構造を正確に決めることができないのである。

次に示す Chastain (1980 : 509) からの引用は、'expressive performance objectives' が何を指すのかを説明している。学習者のために、真のコミュニケーションを可能にする指導を目指すことが伺える。

Expressive performance objectives tell students what they are to be able to do. They do not tell them specifically what to say nor exactly how to say what they have to say. They are not told they must use a certain percentage of nouns, verbs, adverbs, etc. They are not expected to use only vocabulary learned in the last two chapters. No attempt is made at quantification of linguistic building blocks. Instead, the focus is on the ability to communicate thoughts. The object is to promote individual expression.

すなわち、'expressive performance objectives' とは、学習者に何ができるようになるのかということは伝えるけれども、何を言うのかを規定したり、言わなければならないことをどのように言うのかをそのまま伝えることをしない。学習者は与えられた目標を実現させるために、これまでに学習した語彙や文法構造の中から、自分で選んで使うことを任されるのである。言い換えれば、'expressive performance objectives' は、文字を通して、または、口頭でコミュニケーションをする能力、すなわち、スキルを伸ばすことを目標とする。言うまでもなく、その目的は個々人の表現能力を伸ばすことにあるのである。

これまで述べてきたことを要約すると、英文法中心の英語教育は、英語の基礎的知識を教えることを目標としていたということ、そして、総合的な英語運用力を目指す英語教育は、その基礎的知識を意識下で用いて、自分自身の考えや意見を相手に文字を通して、または、音声を通して伝えたり、また、相手の考えや意見を文字を通して、または、音声を通して、受け取る能力を育てることを目標にしていると言うことができる。当然のことながら、前者、すなわち、英文法中心の英語教育は、教えた英語の基礎的知識をどれだけ憶えているのかを評価することになり、後者、すなわち、総合的な英語運用力を目指す英語教育は、その知識を使って、自分の伝えたいことをどれだけ伝えることができるのかを評価することになる。その評価の方法も、当然、異なってくる。

2.2. 一般的に、英語の評価方法として、'discrete-point tests'による場合と、'integrative-tests'による場合とが考えられるが、総合的な英語運用力、特に、スピーキングとライティングについては、'integrative-tests'を用いることによって行われると言うことができる。ここでも、まず、Oller (1980: 482-3) の考えを紹介することにしよう。

Integrative tests are based on a rationale entirely different from that of discrete-point tests. It is assumed that *when a person learns a language, he is in the process of internalizing a grammatical system, or what we might call a psychologically real grammar*. Thus, from the point of view of integrative testing, *the objective of the test should be to assess the efficiency of that internalized grammar. This means that the test should press that grammar into action*. In order to know what the test ought to look like, then, we should have some fairly good idea of how the grammar operates and how it can be forced into action. *It's now fairly well established that integrative tests ---such as dictation, cloze procedure, essay writing, oral interview of various types, and other tasks that require the rapid processing of sequences of verbally coded information in the language---qualify as devices for invoking the learner's internalized grammar.*

ここで、特に注目したいことは、われわれがある言語を学習しているとき、われわれはその言語の文法体系を内在化している過程にあるという考え方である。この場合の文法体系とは、ここでわれわれが「心理的実在文法」と呼んでいるものである。内在化してる文法、すなわち、「心理的実在文法」をどのように評価するのかということがつぎの問題となる。そのテストでは、その内在化された文法がどのように使われているのか、言い換えれば、その効率 (efficiency) を見なければならぬ。従って、テストは、その内在化された文法、すなわち、「心理的実在文法」が表面に形として現れるように仕組まなければならないことになる。具体的には、「書き取り」(dictation)、「クローズテスト」(cloze procedure)、「エッセイ」(essay writing)、「インタビュー」(oral interview of various types) など、情報を素早くその言語に組み込むことを要求する仕事を課すテストを考えればよい。言い換えれば、学習者が内在化した文法を引き出すための仕組みを考えればよいことになる。

従って、一般的な言いかたをするなら、総合的な言語運用力を評価するということは、

学習している言語の文法体系がどれだけ内在化されているのかをその対象とする。上で、ある言語（たとえば、英語）を学習しているとき、それは、その言語（英語）の文法体系を内在化している過程にあると述べたが、そのことは、その評価が、常に、「文法的に正しい、または、正しくない」という基準によるのではなく、どれだけ話し手（または、書き手）が自分の伝えたいことを、その「内在化された文法」を使って、表すことができたのかを評価の対象にしなければならないことを意味する。したがって、4技能(スキル)の中の、特に、創り出す技能(スキル)である「スピーキング」と「ライティング」については主観的評価が入ってくる。ただし、評価するポイントを前以て伝えておくことによって、あるいは、複数の教師が評価することによって、主観的評価の中にある程度の客観性を取り入れることも可能である。一方、「ヒアリング」と「リーディング」の評価は、'discrete-point tests'によって行われることができ、客観的評価ができることを付け加えておきたい。

III. おわりに

以上、総合的な英語運用力の評価について、「心理的実在文法」の観点から検討してきた。英語をコミュニケーションの手段として教えることを目標にするとすれば、従来からの語彙と文法を教えることに終始するだけでは十分な英語教育とは言うことはできず、次の段階、すなわち、それらを運用できるように指導することが求められることになる。

英語を運用できるということは、英語の文法を内在化していること、すなわち、「心理的実在文法」を仮定することができる。この観点からみれば、英語を学習しているということは、英語の文法体系を内在化している過程にあると考えることができる。従って、英語の文法を内在化している過程にある学習者の創り出す英語の発話（または、文章）は、文法的に正しいかどうかだけで評価することはできないことになる。特に、「スピーキング」と「ライティング」の評価においては、文法的な間違いがどれだけあるのかということより、どれだけ伝えたいことを分かるように伝えることができたかに焦点が置かれ、当然、そこには、主観的評価入ってくる。言い換えれば、総合的な英語運用力の評価は、主観的評価の中に客観性をどのように取り入れるのかが教師に問われることになる。具体的な評価については稿を改めることにしたい。

参考文献

- Chastain, Kenneth D. (1980), Evaluating Expressive Objectives, in Kenneth Croft (ed.) *Readings on English as a Second Language: For Teachers and Teacher Trainees*, pp. 507-517, Winthrop.
- Oller, John (1980), An Interview with John Oller: Language Testing Today, in Kenneth Croft (ed.) *Readings on English as a Second Language: For Teachers and Teacher Trainees*, pp.481-491, Winthrop.
- Krashen, Stephen D. & Terrel, Tracy D. (1983), *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*, Alemany Press.